

「土地の断片」をつづる

ーフクシマの故郷を題材としてー

はじめに | 想起すること

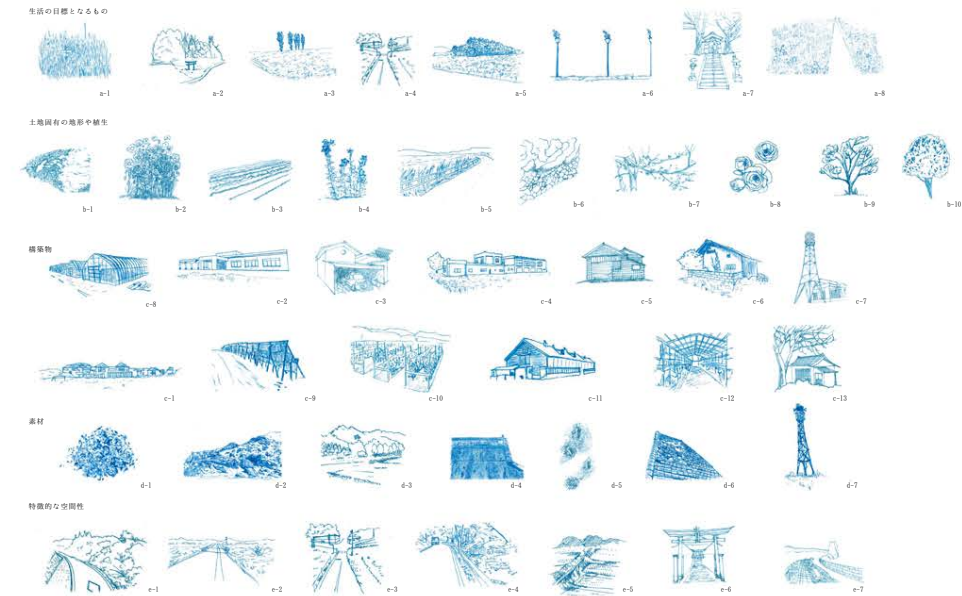
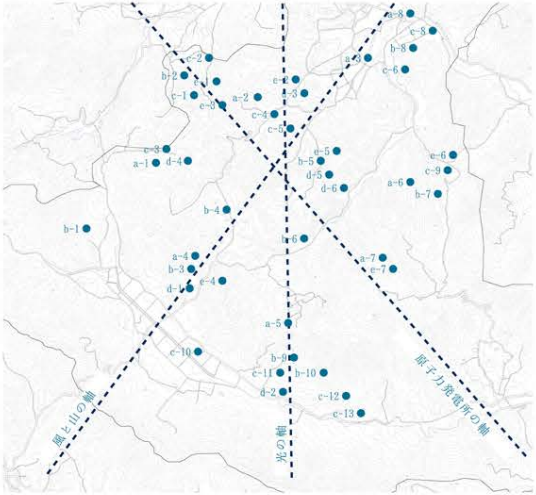
私たちは、ある物事をきっかけに、ふと、時間を超え、場所を超え、記憶の中を移動することができる。小説「失われた時を求めて」では、マドレーヌの香りによって、幼い頃の記憶が連鎖的に思い出される。

「私は何気なく、お茶に浸してやわらかくなったひと切れのマドレーヌごと、ひと匙の紅茶をすくって口に持っていった。(中略) そのとき一気に、思い出があらわれた。この味、それは(中略) 昔叔母が紅茶が菩提樹のお茶に浸してさし出してくれたマドレーヌの味だった。」(引用:「失われた時を求めて」、マルセル・ブルースト著、鈴木道彦訳、集英社)

故郷を想うとき、過去を想うとき、想像すれば遠い地球の裏側だとしても、一瞬で迫り着くことができる。思い出すこととは、ある事物、目的、地点、思想の間を行き来すること。一瞬で、距離や時間、縮尺という概念を、超えること。もう、土地に立ち入ることができなく、失ったものに面するフクシマだからこそ、「想起する」という手法が重要な意味を持つ。

調査・分析 | 「土地の断片」の採集

福島原子力発電所事故により避難した人たちは、避難地にフクシマの記憶や縁さえも引き継ぐことができていない。避難した人たちにとっても、フクシマが故郷であることには変わりなく、フクシマと避難地の関わり方を模索する必要がある。計画にあたり、避難地区に指定された飯館村を訪れた。この地は、避難地区に指定された後、避難が一部解除されており、少しずつ村民が戻り始めている。本計画では、避難地に引き継ぐことのできなかったフクシマの記憶や縁を「土地の断片」と呼び、採集を行う。飯館村では、地形、自然、構造物というその土地特有のものを採集することができた。これは、飯館村出身者から実際に聞いた記憶であり、私が現地で見ただけのもの、実際の記録である。



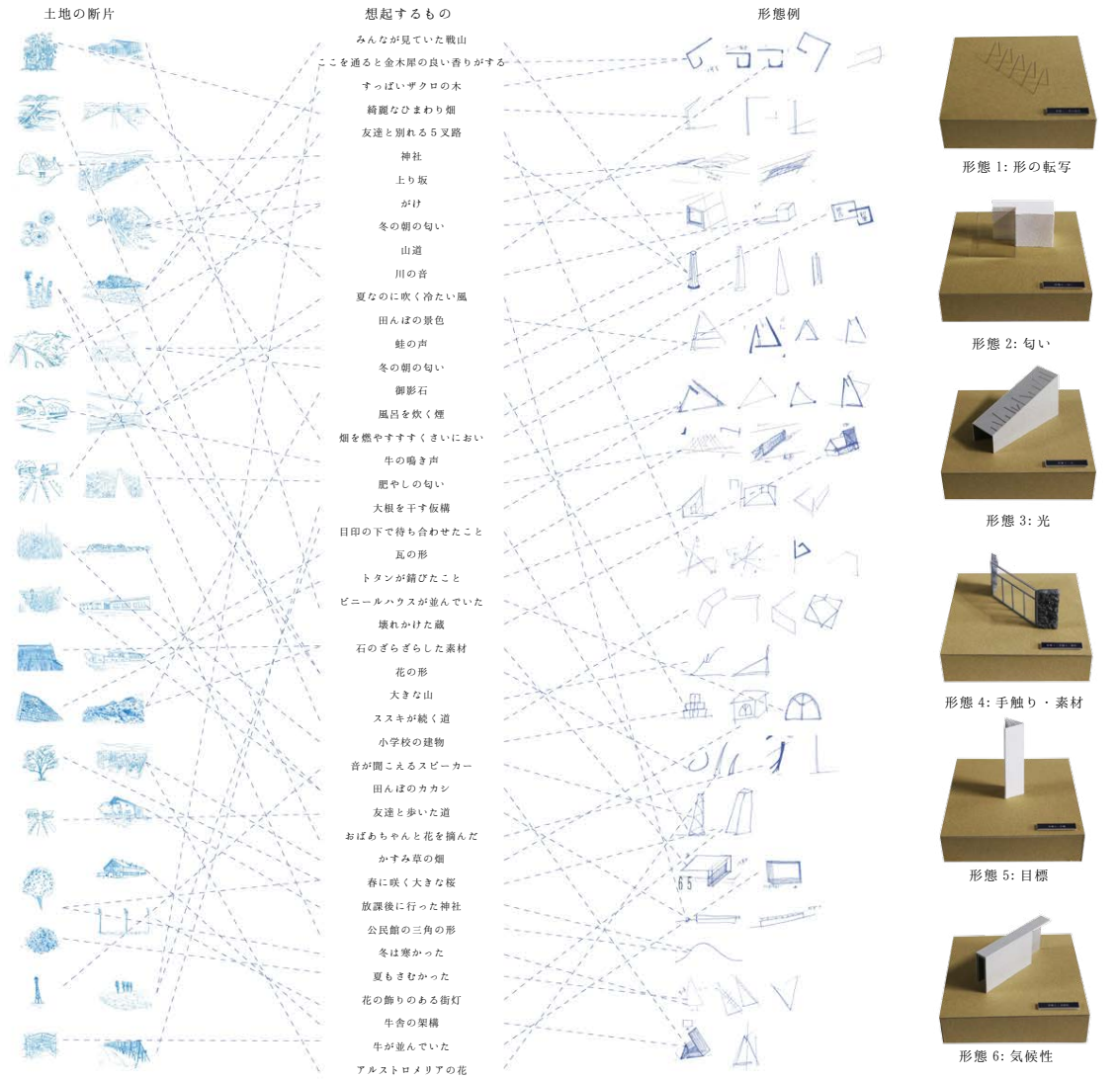
手法1 | 記憶を宿す「拠り所としての花」

飯館村には、「土地の断片」である自然的地形、気候、歴史を踏まえ形作られた、つまり「土地の断片」を担う、花の栽培がある。花は、汚染された土地でも食物に比べ、安全に栽培でき、復興の拠り所となった。また、花は重要な意味を持つことができる。例えば、亡くなった人が育てていた花は、毎年同じ時期に花を咲かせることで、故人の記憶を引き継ぐことができる。また、たくさん集まることで圧倒的な力を持つことも可能になる。花は、個人の思いを引き継ぎ、伝え続ける可能性を持っている。



手法2 | 「土地の断片」・想起するもの・形態例の関係図

「土地の断片」に似た五感に訴えるもの・空間性などにより、記憶を想起させることが可能であると考える。「土地の断片」に似た五感に訴えるもの・空間性などを「形態例」とし、以下に「土地の断片」・想起するもの・形態例の関係図を示す。それぞれは一対一対応ではなく、関連付けられて、様々な事物を行き来するものである。さらに、個人によって想起され方は多岐にわたり、明瞭な言葉で表すことはできないが、五感が敏感に働く空間であることは統一されており、そのような形態例を体験することで「土地の断片」に迫り着くことができる。



計画 | 「福島原子力発電所事故後の個人の生活を支える装置」と「土地の記憶を共有する花のつながり」

「土地の断片」を想起させる、個人の復興のための計画。フクシマ原子力発電所事故の避難指示により、離れ離れになってしまった住民たちが、この計画を通して、離れた場所に住んでいても、同じフクシマでの記憶を共有し、共同体として、これから生きていくための計画。

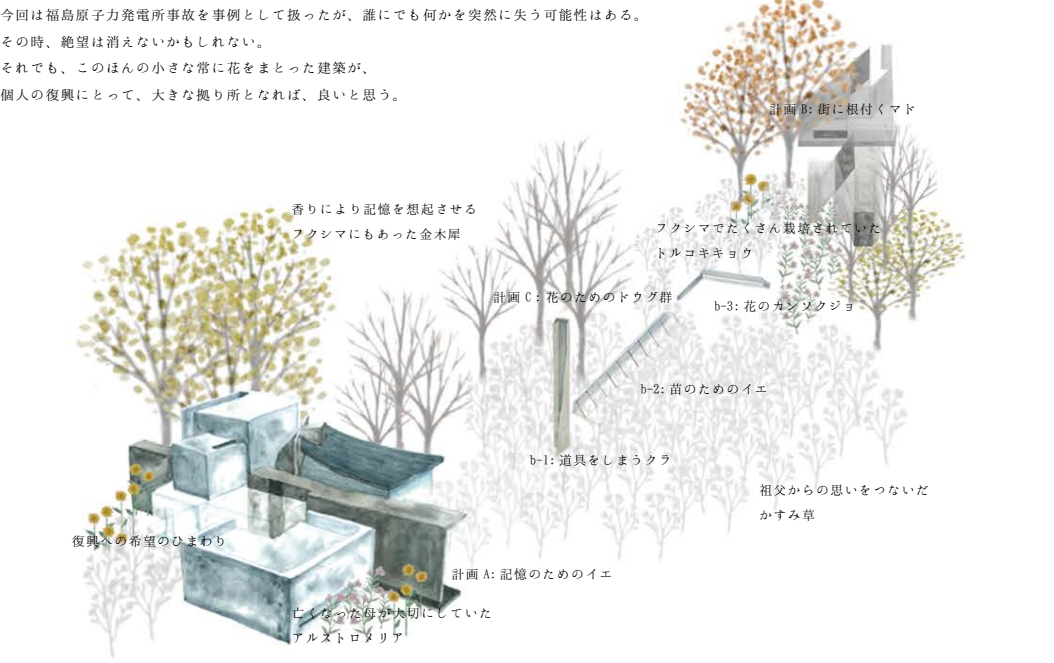
私の故郷は、フクシマであり、フクシマ原子力発電所事故の経過を近くで見えてきた。これは、福島県出身者の立場としての、建築的提案。

小さくてバラバラな建築空間は、記憶を宿す花と常に関係を持つことで、つながりを持ち、同じフクシマの記憶を土地に離れていても共有することができる。「土地の断片」は、花を介した建築物によって鮮明に思い出される。避難によってバラバラになってしまった人たちだけけれど、この計画によって、同じフクシマの土地に住んでいたのだという思いは、失われることがない。花と建築は、記憶を宿し、個人の記憶を引き継ぎ伝える大きな可能性を持っている。

本計画は、個が想起することによって、多数の人と同じフクシマの土地を共有することを目的とした。今回の3家族は、物理的には同じフクシマの土地に到達ことができないが、同じ土地をつづり、新しい生活を手に入れることができる。個人にとっての復興のあり方を提案するとともに、物理的な土地を持たない、新たな共同体のあり方の提案。

今回は福島原子力発電所事故を事例として扱ったが、誰にでも何かを突然に失う可能性はある。

その時、絶望は消えないかもしれない。それでも、このほんの小さな常に花をまとった建築が、個人の復興にとって、大きな拠り所となれば、良いと思う。



ベンチに座りながら、畑を見る。
亡くなった祖父が野菜農家として大切に守り続けてきた畑に今年はいかすみ草が咲いた。
畑一面に咲いたいかすみ草は美しく、圧倒的で、震災によって農業を諦めなくてよかったと思う。

敷地 | フクシマと3つの家族

本計画は、福島原子力発電所事故が発生するより前に、フクシマに住んでいたとき、深い関わりのあった3家族についての計画。

2011年、福島原子力発電所事故前には福島県飯館村に住んでいた3家族であったが、2011年の避難指示、2017年の避難解除を経て、それぞれ異なる場所で暮らすことになった。3家族は、フクシマでの縁や記憶を、新しく住む場所に引き継ぐことができていない。

計画A(福島県飯館村)は、避難解除により戻ってこれた家族、計画B(埼玉県さいたま市)は子供のために帰らないことを選んだ家族、計画C(福島県二本松市)は事情により帰ることのできない家族にとっての計画。



□家族Aプロフィール
・飯館村に帰れるから、帰ることを選んだ、60代夫婦。
・震災前は農業を営んでおり、畑を持っている。食べ物の栽培は、放射能基準により厳しいため、花卉栽培により、もう一度収入を得ようとする。
・避難中も一時帰宅期間を活用し、持っている畑に放射能レベルを下げるかもしれないというひまわりを植え続け、先祖代々受け継いだ畑を守り抜くとともに、美しい花で被災者に希望を与えた。
・頑固で、飯館村で生涯を生き抜きたい意思を持つ人。
・故郷の復興のために、最善を尽くしたい。

□家族Bプロフィール
・帰りたいけども子供がいるからフクシマに帰らない。
・20代夫婦、子供一人、妊娠中。
・村外へ避難し、マンションを購入し生活することにした。
・子供が幼く、専業主婦の妻は、子供を最優先にこの先の生活を考えることにした。
・子供のために、自分たちの生き方を変えた夫婦。
・幼い子供は大きくなった時に飯館村のことをもう覚えていないかもしれないけれど、飯館村での縁はとても素敵で、記憶はつないでいこうと思った。

□家族Cプロフィール
・飯館村に帰りたいけども未だに避難地区であるから、帰ることができない。
・50代夫婦、子供三人。
・震災関連死で母を無くした。
・酪農をやっている、牛を処分した。
・震災によるたくさんの悲しい過去をもつ家族。
・新しい職を見つけることができ、もう帰るめどが立たないので、家を新築したい。
・震災によって母と職業を無くし、酪農をもうやることはないと思う。
・諦めも感じたが、やはり飯館村のことを忘れることはできない。



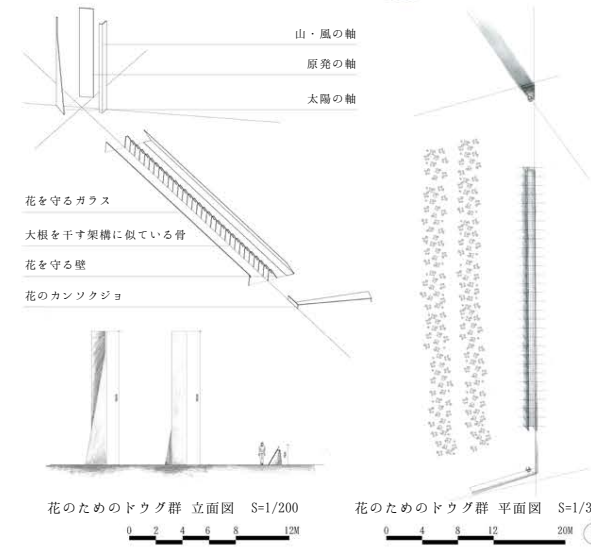
亡くなった母が大切に育てていたアルストロメリアの花が、低い窓から見える。
もう会えることのない母だけれど、毎年、この花が咲く初夏だけは、
母に会えたような気がした。



新しい家の窓から、ひまわりが見える。この花は放射能を取り除くかもしれないらしい。
震災後、飯館村にひまわりが咲いていた。
みんな復興のために必死だったんだ、と思った。

計画 A | 花のためのドウグ群

花を育てることに決めた、農家の家族のための計画。
「土地の断片」から導き出された軸をもとに、建築を組み立てる。建築は、苗のためのイエ、道具をしまうクラ、花のカンソクジョの三つから構成され、花を中心とした生活をする家族にとって、農業の中心となる場所である。それぞれの形は、「土地の断片」の転写や、断片を拡大する形からきている。



亡くなった祖父から受け継いできた畑に、今年は花が咲いた。
その家族は、これなら、空からも見えやすいだろうと思う。
花は、人の思いをつなぐ。



この架構の形は、今はもうほとんど見られることがなくなった、大根を干す仮設の架構に似ていた。人が入れないくらい小さな架構。苗の世話をするには、ビニールを開ける。



そのクラは、花のための小さな道具をしまうことができ、日時計やモニュメントとしての役割も担う。道具を片付けにトウの中へ入ると、一人になれる空間。



苗を育てるイエは、花の背丈と同じくらいの高さに計画されていて、春までに苗を育て、役割を終えると花の成長とともに姿を消していく。
花を育てる作業の時期を知らせてくれる建築。



花のカンソクジョは、花の成長を見ると同時に、このカンソクジョを頼り、避難した人たちも、拠り所としての花のカンソクをすることができる。



そのクラは、空だけを切り取り、風が吹き込み、「土地の断片」である自然の気配を拡大して感じることでできる建築。



計画 B | まちに根付くマド

被災者にとっては、重要な意味を持つ。植生を室内に引き込むようなマドは、都心にいても植生の中で生きていることを感じ、福島と同じ花を見ることができた。この計画は、この都市に元から住む人にとっては、ごく普通の光景。でもこの建物は、街を明るくしたように思う。花がたくさん咲いた時には、たくさんの人が家の前を訪れてきた。



窓により切り取られるフクシマの記憶。
花を囲むことができるように計画された建築空間は、避難地である新しい場所での人の縁をつなぐ。



計画 C | 記憶のためのイエ

個人の中にある記憶を想起させるようなイエを計画する。フクシマの記憶を担っている花と共に暮らすイエ。
「土地の断片」を想起させることのできる形態を集約したような形をもつ。その形態は、避難地である二本松市と関わりのある形で、様々な軸を持つ。風の軸を持ち、フクシマにあった山のために、二本松にもある山の軸を持つ。新しい避難地とも積極的に関わりながら、故郷であるフクシマとどう関わるか、考えていくイエ。



木漏れ日のような光が入る階段は、山を登る体験に似る。
旅館で有名だった石を使った北側の暗い部屋は、
山の麓にあった洞窟に似ていた。



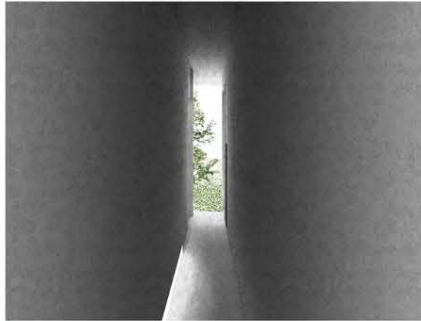
香りがする花のある庭と隣接した
ダイニングキッチン。
フクシマでも金木犀の香りがしていた。



壁の上下にそれぞれマトがあり、
小さな花と大きな木が見える。
それは、母が大切に育てていたものだった。



玄関は、半屋外空間が家の中に侵入する。
寒い冬の朝は、フクシマと同じ外気の香り。
人も植生も一体となってイエに住まう。



イエの真ん中を風が通る廊下が突き抜ける。
夏は涼しい風が吹き抜け、
福島のマヤセという風を思い出す。

